

も加わって学際的な内容となり、参加者は韓国など国内外から約九十人と、本学会としては近年にない盛会でありました。肥後医育振興会には多大なご支援をいただき心から感謝申し上げます。

菊池恵楓園には開設以来百年を超える期間に蓄積された様々な文書群が診療録をはじめとして今に残されています。平成十三年、熊本県はハンセン病施設関係資料収集事業を展開した際、菊池恵楓園、熊本大学などに残る資料の回収・整理・保存事業を肥後医育振興会に委託しました。それが当園の資料整理の嚆矢であり、壮大なアーカイブズ構想へと向かっています。

シンポジウム「ハンセン病アーカイブズ構築のこれから」過去を振り返り、未来に「は、一次資料に立ち返り史実を丹念に検証する姿勢や、現地にて一次資料を残すアーカイブズの理念など、今後ハンセン病史研究の深化に繋がる示唆に富んだものとなりました。

また、今学会では菊池恵楓園を会場としたことで、当園の社会交流会館（歴史資料館）へ足を運ぶ参加者の姿も多く見受けられ、熊本におけるハンセン病の歴史と恵楓園の立ち位置について理解が深まったことと思います。なお、同資料館は水・日曜祭日を除く十時～十六時、開館しています。企画展も開催していますので、気軽にお立ち寄りいただければ幸いです。

『第三十九回むし歯予防全国大会』開催報告

第三十九回むし歯予防全国大会会長
一般社団法人熊本県歯科医師会会長

浦田 健二

十月二十一日（土）午後二時より、熊本駅前のかまもと森都心5Fプラザホールにおいて、テーマを「健口長寿」のフッ化物の応用・継続の力」と題して開催されました。主催は「NPO法人日本フッ化物むし歯予防協会（日F）」で、全国より北海道から沖縄まで、三五七名もの多くの参加者が来熊され、海外からも釜山大学より十名の参加がありました。まず大会会長である熊本県歯科医師会浦田健二会長、日Fの山内皓史会長の挨拶の後、熊本県知事 蒲島郁夫氏、熊本市長 大西一史氏の祝辞があり、更にくまモンも登場し、「くまモン体操」を来場者と共に踊り、会場は大変盛り上がりしました。

基調講演は、新潟医療福祉大学教授石上和男先生による「フッ化物の応用で健口長寿を目指そう」12歳児のむし歯が少くない新潟県・17年連続日本一の取り組みを演題に基調講演が行われた。四十六年間に及ぶ新潟県での予防の取り組みについてまた、フッ化物洗口を継続して取り組むことが大事と強調され、今後の取り組みについても話されました。

シンポジウムでは、大林裕明学校歯科担当理事を座長に四名の方が講演され

た。まず熊本県健康福祉部井上秀代氏が「熊本県におけるフッ化物洗口事業の取り組みについて」、熊本県では、十二歳児の一人当たり平均むし歯数が平成二十一年度には二・六本だったのが平成二十八年度には一・一本と有病状況が改善され、平成二十九年七月に全小中学校（政令市である熊本市を除く）でフッ化物洗口が実施され、目標の一〇〇%を達成したと報告されました。

熊本県玉東町役場保健師肥合博子氏により「フッ化物洗口から始まった玉東町の歯の健康づくり」を演題にライフステージごとの歯科保健事業について、熊本市立城東小学校養護教諭桑田奈津子氏



から「学校における歯・口の健康づくり」にいたわり励ましあい絆の力を育む歯科保健」を演題に学校全体で進める歯と口の健康づくり、熊本県歯科医師会副会長渡辺賢治先生から「フッ化物の応用と園・学校歯科医のあり方」二十三年間の取り組みを通して「を演題に先生が診療されている美里町での二十三年間の取り組みに関しての講演が五時半過ぎまでそれぞれありました。

昨年予定されていた同大会ですが、地震の影響から、会場が使用できず今年に延期されましたが、大盛況のもと終わることができました。

第十八回熊本エイズセミナー 国際シンポジウム開催報告

熊本大学エイズ学研究センター長

松下 修三

平成二十九年十月三十日～十一月一日の三日間、エイズ学研究センター設立二十周年記念セミナーとして、くまもと県民交流館パレアにて第十八回熊本エイズセミナー国際シンポジウムを開催いたしました。総参加者一三三名中三九名が、留学生を含む外国人学生・研究者と国際色豊かなセミナーとなり、口演二十四題及びポスター三十三題と例年通りの規模で開催することができました。

海外から英国 Oxford 大学の Tomas Hanke 博士、仏 INSERM の Victor Appay 博士、仏 Pasteur Institute の Asier